

Rajakylän School 訪問

松江ひかり幼稚園 副園長 小松崎 奈緒子

1 はじめに

私立学校教員海外研修団は、2025 年 9 月 9 日視察先である Rajakylän School を訪問した。

2 施設概要

ラヤキュラン学校のあるオウル市はフィンランド北部ボスニア湾沿いに位置する北フィンランド最大の都市である。市中心部から北に 7 キロほど離れた場所に 1977 年設立され、2014 年修繕がなされている。広い敷地にレンガ色の 2 階建ての建物が広がっており、入り口付近に柵、門など外部を隔てるものがない。この国の治安の良さがうかがえた。そして中には広々としたビュッフェスタイルのカフェやゆったりとくつろげる職員の休憩室もあった。



ラヤキュラン学校の正面

3 学校概要

フィンランドの教育理念に基づき、個々の成長と多様性を尊重した学びの場を提供している。7 歳から 16 歳の児童・生徒が 1～9 学年に約 610 名在籍。他に、学校外にあるプレスクールに通う 6 歳児が授業を受けることがある。近隣には高級住宅地あり、地価の低い地域あり、また移民が増えてきておりと、様々な文化・家庭環境の混ざり合う複雑な環境である。その中で地域が一体となり子どもたちの健やかな成長を支えている地域密着型の公立校である。

一般的なクラスその他、音楽クラスやテクノロジークラスがある。また、支援を必要とする児童、生徒のクラスを 5 クラス設置している。これにより、全ての子どもが自宅から最も近い小学校に通える環境を整えている。そのほか、移民者向けに、フィンランド語や算数等が学べる準備クラスがある。近年はウクライナからの移民が増加している。

学校説明を受けた音楽室には 20 台以上のギターがずらりとぶら下げられており、教室のコーナーには少し段の上がったステージにドラムセットが置かれていて、室内に入った瞬間声をあげてしまうほど、充実した楽器類がそろえられていた。

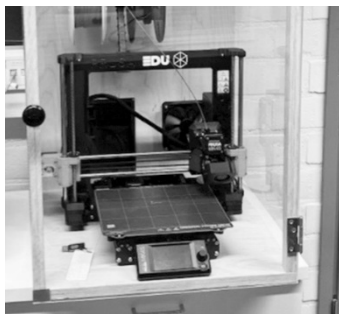
4 STEAM 教育

【環境】

ラヤキュラン学校は STEAM 教育をとりいれて 6 年になる。学校で行った STEAM 教育の結果等を、オウル大学とシェアし協同開発しているという。

教師側が学ぶ環境としては大学の教育学部で 25 単位取得出来る STEAM のコースがある。またさらに 60 単位取得し詳しく学ぶコースもある。

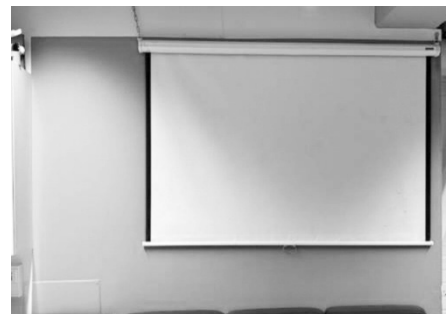
校内にはプログラム可能な Bee-bot、レゴ社の SPIKE、3D プリンター、レーザーカッター、プラスチックカッター、グルーガン、マグカッププリンター、ミシン他の裁縫道具等、STEAM のプロジェクトを推進するための様々な教材、器具、工具が揃い、発表を撮影するためのグリーンスクリーンも設置されていて、公立の小中学校とは思えないその環境に驚かされた。



3D プリンター



Bee-bot



グリーンスクリーン

【教育の進め方】

- ①目標をたて、コアカリキュラムの内容に沿ったプロジェクトを考える
- ②問題に対しアナライズしアイデアを出す
- ③グループワークの中で自分に何ができるか、自己評価する
- ④プロトタイプが出来たら商品をテストし、商品を作り上げて評価する
- ⑤発表し皆にプレゼンしシェアする
- ⑥最後はプロジェクトをグループで自己評価をする。

上記のような進め方をし、1つのプロジェクトを小グループで進める。発表し、結果を自己評価するまで教育するそうだ。

【目標】

STEAM 教育の目標は技術的な向上だけでなく、協働学習、学習の自己調整、問題解決能力、起業家精神の育成を図ることだと Essi Vuopala 副校長は繰り返し言っていた。1年から9年まで段階を踏んで難しいプロジェクトに取り組んでいくので、それに伴いロボティクス、コーディング、マルチメディア、デジタル製造、AI などのテクノロジーを学ぶ。同時にグループワーク、ペアワークを通して、自己能力の理解、グループ

の強みを把握し問題を解決していく。

STEAM 教育を受けた卒業生はグループワークが得意になる。グループワークは問題解決能力を高め、社会に出てもその能力を生かすことが出来る。

【評価の仕方】

プロジェクトは個人が考えた方法なので評価は難しい。教師は、『問題解決にどのような行動をとったか』『みんなが参加したか』『どのように成功したか』等プロセスに注目し、評価に繋げるといふ。また、作品があれば、『責任がある作品か』『使えるものか』『エコか』『品質がどうか』といった点も考慮する。そして、科学・数学が使われている作品であれば、『正しく使われているか』『正しく作られているか』という内容も評価の対象となるそう。

【STEAM 教育とウェルビーイング】

STEAM 教育では、生徒が主体的にどういう教育を受けたいのかを考え、必要な知識や技術を自ら選び取っていく。そのため、生徒は大きな達成感や高い習得度を獲得し、自身に対してよりポジティブな感情を持つ、つまり、心理的なウェルビーイングが向上するという研究結果があるという。

5 生徒のウェルビーイングについて

学校長、副校長、マネージャー、ソーシャルワーカー、学習相談員、保健教諭、生徒の福祉を考える職員がチームを組んで、月 1 回ミーティングを行い、学校全体、生徒個人のウェルビーイングの向上について話し合う。また、中学生には年 2 回、小学生には年 1 回、無記名のアンケートを実施し教員にシェアする。(いじめについて、教育環境(授業は静かに行われているか等)について、学校が安心できる場所かどうかについて等) その中で対応した具体的な事例として、『児童・生徒内に電子タバコの利用について』があがった。子どもの間で利用者が増加しており、小学生にまで広がってきているという。この問題を保護者にシェアし、学校医が子どもたちに、喫煙が体に及ぼす影響や害を伝えた。そしてその内容をまた保護者にシェアし、子ども同士はソーシャルワーカーを交え話し合いを行ったそう。取り組みや事例を伺い、日本でも身近な問題をウェルビーイングという切り口で取り組むのは難しい事ではないと感じた。

6 おわりに

幼児教育の立場から今回の視察で感じたことは、私が勤務する幼稚園の教育の中でも、プロジェクトの規模、利用するツールに違いはあるものの、同じことをしていると感じた。例えば作品展で何をつくるか、となると、子どもたちが意見を出し合いテーマを絞り、担当ごとにグループに分かれる。別れたグループで何を使ってどう作るか話し合い、

製作する。教師は意見のとりまとめのアドバイスをしたり、援助したりする。自分たちでやることによって意欲が高まり、また、終えたときに達成感を得る。幼児教育の延長線上に STEAM 教育がつながっていると感じた。

また、個人的に、ラヤキュラン学校の視察の中で関心をもったのが、職員の休憩室であった。高い天井から光が差し込む作りになっており、広々とした空間を囲うようにソファが並べられていた。コーヒー文化と言われるフィンランドらしく、午前中の時間であっても教職員の方々が、コーヒ一片手に談話をする姿が見られた。案内して下さった Essi 先生の「ここは生徒が入れない静かな場所です。私はここが大好きです。」とおっしゃっていたのがとても印象的だった。職員のウェルビーイングもまた、日本の教育システムの中に位置づけていきたいと感じた。



広々とした職員の休憩室



集合写真